

平成29年度
発生予察情報

特殊報第2号

平成29年7月31日
埼玉県病虫害防除所
(TEL:048-539-0661)

クビアカツヤカミキリの発生について

平成29年7月、県北東地域のすもも（プラム）の樹幹にカミキリムシ類の脱出口と多量のフラスの排出があり被害が認められた。樹からは成虫が発見され、県環境科学国際センターはクビアカツヤカミキリと同定した。

* 特殊報：新規の有害動植物を発見した場合及び重要な有害動植物の発消長に特異な現象が認められた場合に発表するものです。

- 1 害虫名 クビアカツヤカミキリ (*Aromia bungii*)
- 2 発生経過
 - (1) 平成29年7月、埼玉県環境科学国際センターは県北東部の果樹のすもも（プラム）において、カミキリムシ科の成虫の発生と幹に成虫の脱出孔、多量のフラス（幼虫の糞と木くず）の排出（写真1）を確認し、採取した成虫をクビアカツヤカミキリ (*Aromia bungii*) と同定した。
 - (2) 本種は平成25年に愛知県、平成27年に徳島県、平成28年に大阪府、平成29年に栃木県、群馬県で特殊報が発表されており、当県でも平成25年に用水路沿いのサクラで発生が認められ警戒中であった。
- 3 形態及び発生生態
 - (1) 成虫の体長は28～37mm。通常、前胸背板を除き光沢のある黒色を呈する。前胸背板は明赤色だが、個体により黒色となる（黒色個体はわが国未記録）。触角と脚部は暗青灰色。前胸背板の側面には大きなとげ状の突起が一对あり、背面には4つの小さな突起を備える（写真2）。
 - (2) 樹木内部で蛹から羽化した成虫が6月上旬から8月上旬に出現し、交尾・産卵する。産卵は、幹や樹皮の割れ目に行い、8～9日後には卵が孵化し、幼虫が樹木内部に食入する。幼虫期間は2～3年、春～初夏の摂食が盛んであり、この時期にフラスが多く見られる。
- 4 被害の特徴
 - (1) 幼虫が樹木に寄生し、幹や枝の内部を食い荒らし、時に枯死させる。
 - (2) 海外での報告では、サクラ、カキ、ウメ、モモ、ザクロ、オリーブ、ヤナギ、コナラなど多くの樹種に寄生するといわれている。

5 防除対策

- (1) 羽化した成虫の分散防止及び新たな産卵防止のため、樹幹部にネット（容易に切れない目開き4mm以下のもの）等を巻き付ける。この際、幹とネット等の間が密着していると、幼虫や成虫が食い破るため、幹に密着させないように巻く。
- (2) 樹を見回り成虫を捕殺する。捕殺する際は、刺激臭を放つ場合があるので注意する。また成虫を防除対象とした薬剤を使用する。
- (3) フラスが排出される幼虫食入孔を見つけた場合は、針金等でフラスを掻き出し、針金等で刺殺するか、幼虫を防除対象とした薬剤を使用する。

幼虫を防除対象とした薬剤

薬剤名 (成分名)	作物名	適用病害虫名	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	フェンプロパトリンを含む農薬の総使用回数
ロビンフッド (フェンプロパトリン)	さくら	クビアカツヤカミキリ	—	6回以内	樹幹・樹枝の食入孔にノズルを差し込み噴射	6回以内
	果樹類 (※、注)	カミキリムシ類	収穫前日まで	2回以内		2回以内
ベニカカミキリムシエアゾール (フェンプロパトリン)	うめ					5回以内(噴射は2回以内、 散布は3回以内)
	もも					7回以内(噴射は2回以内、 散布は5回以内)

※ かんきつ、りんご、なし、びわ、もも、うめ、おうとう、ぶどう、かき、マンゴー、いちじく(種子)、くり、ペカン、アーモンド、くるみ、食用つばき(種子)を除く
注)すももは果樹類に含まれる

成虫を防除対象とした薬剤

薬剤名	作物名	適用病害虫名	使用時期	本剤の使用回数	使用方法
バイオリサ・カミキリ	果樹類	カミキリムシ類	成虫発生初期	—	地際に近い主幹の 分枝部分等に架ける



(写真1) すももの被害
根元に積もったおがくず状のものが
フラス(虫糞と木くず)の排出



(写真2) 成虫：左(♂), 右(♀)